

SNS で知り合った女の子に 鹿島のコスプレさせてみた……

いやあ、そこで
全裸になって

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



Koyas Shimo

先日、SNSで知り合った女の子と仲良くなった。

仲良くなったと言っても付き合っている訳ではなく、当然、肉体関係などはない。

ただ、彼女はかなり自分好みのタイプだったので、

もちろんそういった進展を期待していないと言えばウンになる。

それに、顔がどことなくオレの好きな「艦これの鹿島」に似ていたのだ。

そう思うと、どうしても彼女に鹿島のコスプレをさせてみたくて

ある日、思い切ってダメ元で頼んでみた。

鹿島の衣装でコスプレした姿で

写真を撮らせてくれないか?と。

はじめは断られたが、しつこく何度も頼み込んでいると

「恥ずかしいから一対一でフォトスタジオでならいいよ」

という条件でどうにか引き受けてくれる事になった。

衣装はこちらで用意する約束だったので、

あらかじめ通販で購入。

そして後日、鹿島の衣装を持って

彼女と待ち合わせをし

スタジオへ向かう事になった。

彼女はスタジオへ着くなり、

早速鹿島のコスチュームに着替えてくれた。



え?

私にコスプレを?

「着替えただけど、こんな感じ?」

そこにいたのは想像以上に鹿島にそっくりな彼女がいた。

「か、かわいい…」

しばらく目が釘付けになってしまっただけで想像以上にそっくりだった。

「なんか私ばかり着替えて恥ずかしいんだけど?」

「え、と言っても他の衣装は持ってきてきてないし(汗)」

「じゃあ、そこで全裸になってよ」

「え?! 全裸? それはさすがに…」

「全裸になってくれたら、二人きりだし」

「後で下着姿も撮影させてもいいよ」

「ほんと?…」

イマイチよくわからない理由だが、

「もちがっしょ…」

という下心が出てしまい、

言われるがままに服を脱ぎ始めてしまった。

そして、激しくドキドキしながら

興奮している自分に気がついた…

そこで全裸に
なっつてよ





本当に脱いで
くれたんだ……

「本当に脱いでくれたんだ……」

そう言っていると彼女は自分の鞆の中から
縄を取り出してきた。

「これであなたの手を縛るね……」

「んっ。」

手際よく手を後ろに回され、
あっという間に両手両足が縄で縛られて
まったく身動きがとれなくなった。

「これでよし、っつと。」

「じゃあ、記念撮影しておくね」

彼女はスマホで全裸になった僕を撮影した。

「え、ちよっと……」

「オチンポ丸出しの恥ずかしい写真が撮れた。」

「前々から男の人で試してみたい事が
あったんだよねー」

「試してみたいって何ですか？……」

「男の人がエッチな状況の中で
どれだけ射精を我慢できるのか……」



ふうくん…
凄い勃起してる

「じゃ、射精ガマンですか?」

「そう、もしガマンできずに
すぐに射精してしまったら

さっきの全裸写真と、
精子まみれの写真も撮影して

ネットに流しちゃうかも?」

「そんなの絶対にやめてくださいー」

「ガマンできればいいだけのこと」

「ところで、何コレ?」
「なんでこんなに立ってるの?」

覗き込むように見つめながら言う。
「裸になって手を拘束されただけで
興奮しちゃってるの?」

そう言うと彼女は、
突然柔らかい指先で
裏スジをフェザータッチしてきた。

「っわ、ちょっと触っただけなのに
オ○ンポが

すっごい、ビクン、ビクン
はねちゃってる…フッフ」

彼女は面白がるように
指先を何度も裏スジを往復させてくる

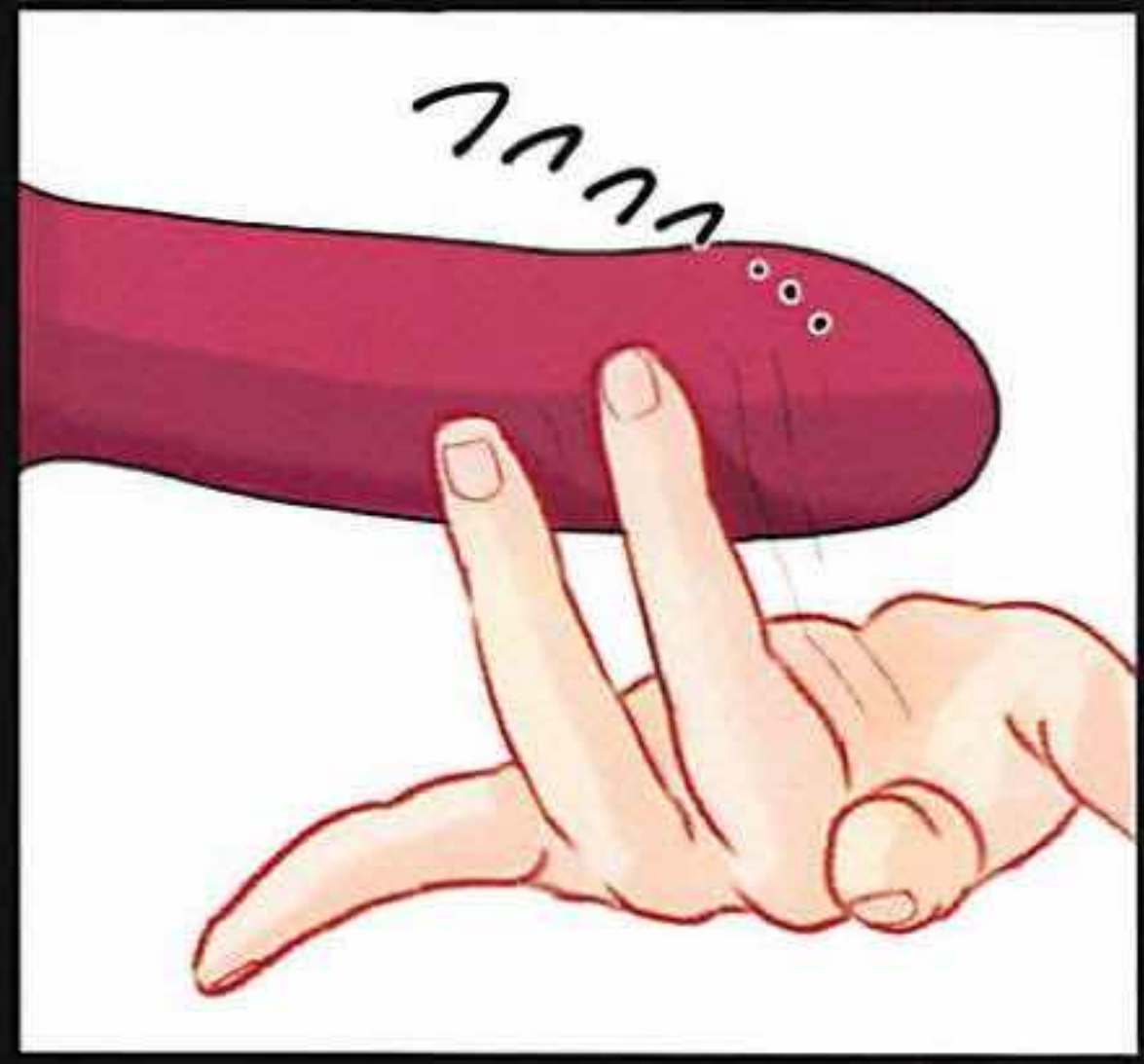
「まだ何もしていないのに
いつの間にか先っぽから
透明な液まで出てきちゃってる」

「まだ何もしていないのに
いつの間にか先っぽから
透明な液まで出てきちゃってる」

「まだ何もしていないのに
いつの間にか先っぽから
透明な液まで出てきちゃってる」

「まだ何もしていないのに
いつの間にか先っぽから
透明な液まで出てきちゃってる」

「まだ何もしていないのに
いつの間にか先っぽから
透明な液まで出てきちゃってる」



「知ってるよ。」

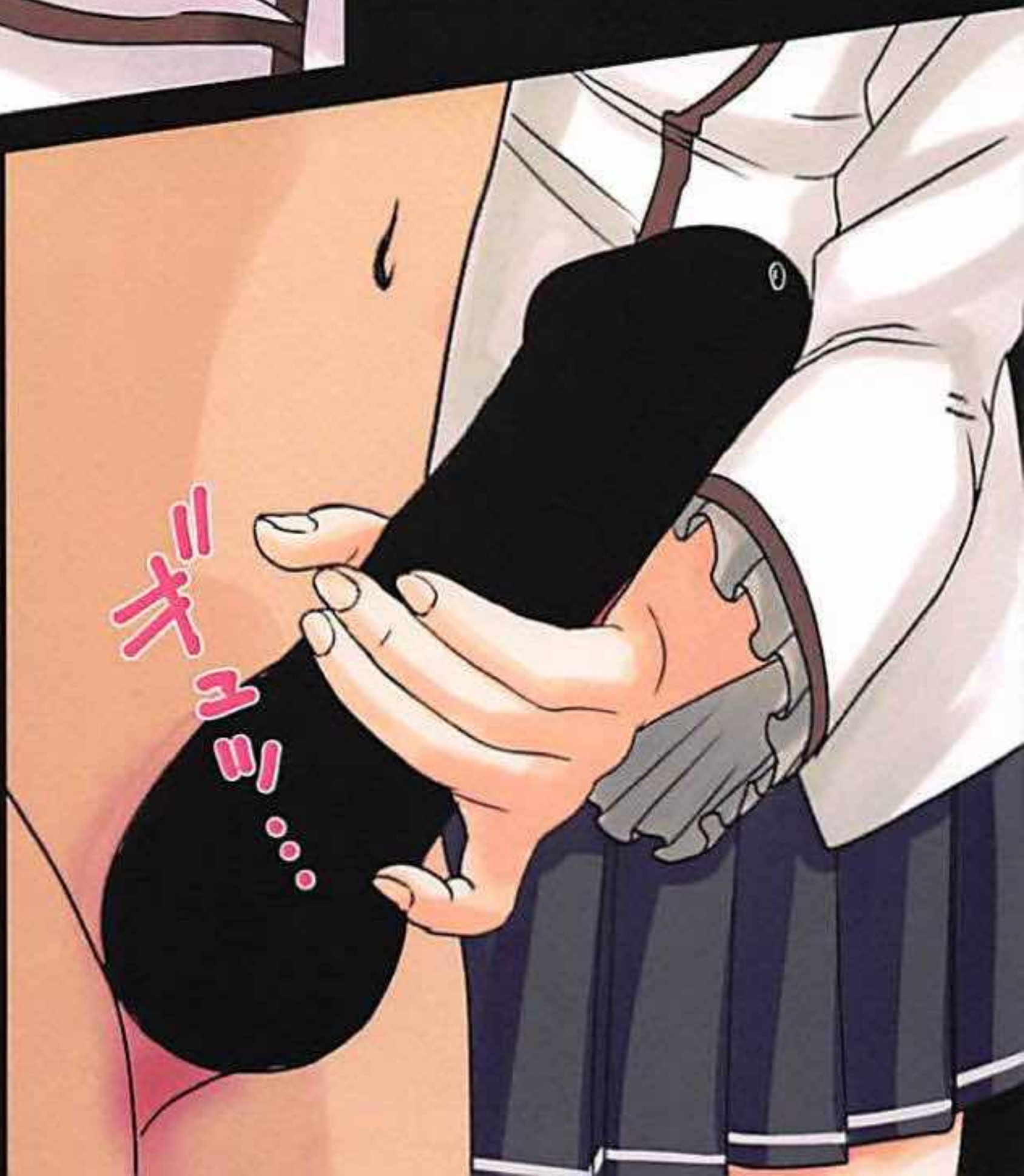
キミがMだったってこと……」

「あらっ…そう言ったただけでも、また少し大きくなった？
もうすっごい上向きでカッチカチになってるよ……」

「そんな今さらジタバタしたって、両手は後ろで拘束されて
いるんだから動けませんよ。」



知ってるよ
キミがMだったってこと



「あら……「J」を「J」や「J」(キム……)

彼女が柔らかい手でいきなりオチンポを
ギュッと握ってくる

「はあ……」

思わず、声にならない息がもれてしまった。

「ゆ〜っくりとしか動かしてないのに
先端から透明な液が「ぶくう」って出てきている
上下の動きを続けると、我慢汁のしずくが
どんどん膨らんでくるよ……」
「このまま先端に触れずにいたら
もっとしずくが垂れてくるかな？」

どうしてそんなに手さばきがウマイんだ？
ってくらい、彼女は巧みな手技で
どんどん追い詰めてくる。

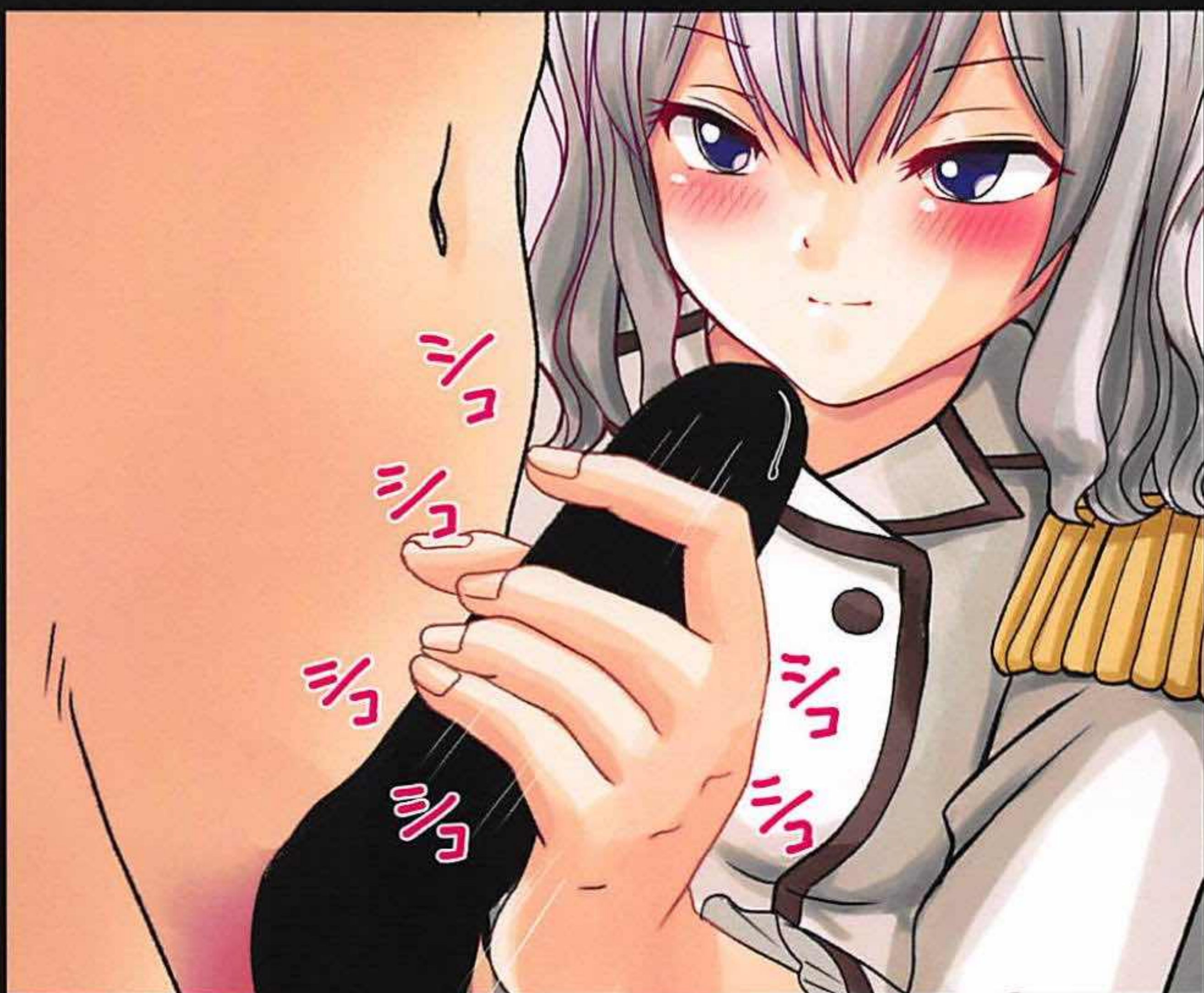
「確か男の人のオチンチンって、カリ首の段差から
この一段落ちる部分が一番敏感なんだよね？
裏スジをなぞりながらこうやって……

コリ……コリ……コリ……コリ……ね？ ほら
コリ……コリ……コリ……コリ……」

「うわっ、ちよっと待って……ヤバイ……気持ちいい」
完全にツボを知り尽くされているかのよつに
彼女の手の快感からはどうやっても逃げる事が
できない。

「もしかして、このオチンチンの膨らみ方……
そろそろ精子が上がってきてる？
射精しちやいそう？」

そんな質問でますます射精欲が上昇してきた
既にガマンの限界に近くなってきた。



ほおくら、
もつともつと
耐えないと
ネットに写真が
流れちゃうよ

ダア〜メ
まだいつちや
ガマン、ガマン、

あ、も、もつ……
イキそう……
イキそうです

が"ん
が"ん
が"ん
が"ん

コリッ
Vロッ

キョロ

ニッ
ニッ
ニッ

ニッ
ニッ

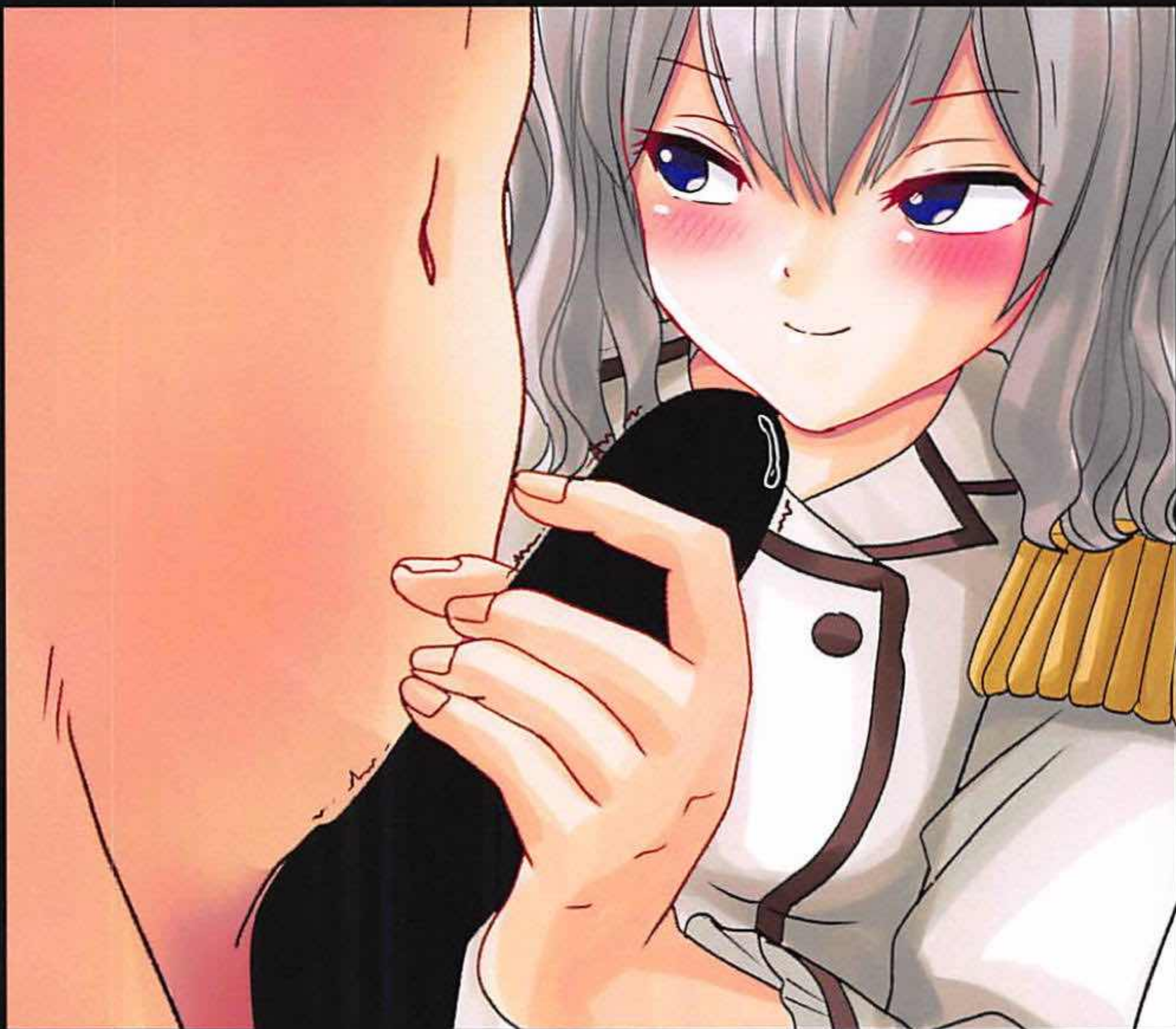
ハア
ハア

ニッ
ニッ



だから
まだ出しちゃダメって
いつてるでしょ





こうして彼女は上下に動かす手を早くしたり、急に遅くしたり、射精寸前で手を離したり、ギュッと締め上げたり…完全に射精のタイミングを読んで何度も何度もおかしくなりそうなくらいに僕の射精をコントロールして楽しんでいた。

「精子、出たくてしかたないんですよ？」
「こうやって何度も寸止めを繰り返して、貯めれば貯めるほど、どんどん量が多くて濃厚なザーメンミルクが出来上がってくるの…」
そういうと、突然彼女の手が止まった。

「じゃあ、ここまで耐えたご褒美に一回休憩をあげる」

女の子に今までこんなことをされた事がなかった僕は、この焦らし手コキだけでさうとう興奮をしていた。
このまま続いてたら一分もたなかったかもしれない。


「今のうちにオチンポをできるだけクールダウンさせておいてね」

「次はもぉーっと、ガマンするのが難しくなるから…フッフ」



しかし、本当に
凄い量のガマン汁ね

じゃあ、そろそろ
再開しよっか
第2ラウンド…



ここからは私の
柔らかく
お口使うので
さっきのと違って、

ここからは
本気モードで
いくから

シロッ

彼女の舌先によるテクニクは優しくくすぐるように裏スジに刺激を繰り返し、亀頭の先にジワジワと精子をおびき寄せたかのように巧みに動き回った。



ときおり、柔らかい唇がスッポリと亀頭を包み込み、口の中でも裏スジや、亀頭の周りを舌でクルクルと回転させながら追い込みをかけてくる

「フフフフ、すごい気持ちいいんでしょ?」
「必死でガマンしてるね。」
口の中で裏筋舐めるたびにピクピク痙攣してるし
ガマン汁がどんどん出てきてる」

彼女にはこちらの状態がすべてお見通しだった。

しかし、全裸の写真をネットに公開されるのだけは
どうあっても回避しないと、知り合いや
職場にバレたら大変なことになる。

SNSで知り合ったばかりの、
まだ素性もよくわからない子だし、ヘタすると
どこで何をされるかわからない…

両手、両足が固定されて身動きも取れない状態で
身動きが取れない上に、彼女にお口で快感を
与えられる度に気持ち良さで
全身に逃げようとする力が入らない…

「ここから最後の追い込みかけていくから
必死に耐えてね。今から10カウントダウン
していくけど、それ以上に耐えぬけたらキミの
勝ちで良いよ」

唾液をいっぱい口に溜め込んで
いやらしい音を立てながら、
ピストンを徐々にスピードアップさせていく。

「じゃああなたが射精するまでのカウント始めるね。
口で啜えながらで聞き取りにくいかもだけど
いう(10)……………くう(9)……………はひ(8)……………」



わわ(7)……

おく(6)……
ンフ……

おお(5)……
ンフ……

おん(4)……

はん(3)……
ンフ……

ひい(2)……

いひ(1)……

ちゅぷ

ちゅ

ちゅぷ

ちゅ

ちゅぽ

ちゅ

ちゅぷ

ちゅぽ

ちゅ

ちゅぽ

へお(ゼロ)!

ンン……
ンフ……

ンン……
ンン……

ンン……
ンン……

あへっ……!





ンンん……

すっごい
濃厚ミルク……

結局、勝負は
負けになったようだが
僕の恥ずかしい
画像がネットに
さらされることは
なかった。

それどころか、
2週間後に
今度は彼女の方から
撮影の誘いが
DMで送られてきた。
自撮りの全裸画像と
共に。

もちろん
断る理由などない。



twitter : @miokikoeru
PIXIV ID : 6096306
WEB : <http://pelcra.net>
mail : cubeeq0_0p@hotmail.com
発行 : STUDIOべるくらっぺ
発行日 : 2017年12月31日
著者 : みおき超(みおきこえる)
印刷 : きょうゆう出版



STUDIO
ぺるくらっぺ